

Special Essay

「自由な空間」

生理学講座 脳・神経機能部門
田中 永一郎

学生が夏期休業に入り、私にも少し時間ができたので、今年度になって初めて医学図書館に行った。セキュリティー・コントロールを通過し、図書館に入ると、以前に比べ明るくなった印象を受けた。まず、昨年までは胸の高さまであったカウンターが腰の高さになっていることに気づいた。次にカウンターに続いて天井まであったガラス製の仕切りも姿を消し、カウンターの上に自由な空間が出現し、図書館事務室の内側まで続いていた。

1990年代の初頭に米国に留学した折に、図書館で初めてこの形式のカウンターを見た。その時は、“自由さ”を感じるよりも、“抛り所のない不安定さ”を最初に感じて、あまり好きにはなれなかった。この図書館は4階建ての建物で丘の傾斜地に建てられている関係で、入り口は3階部分にあり、そこから1階降りて、2階に図書館の事務室があったように記憶している。各階の天井は高く、窓も広く取られていて、丘陵地の木々の緑や紅葉が良く見渡せるように造られていた。1階は庭に続いていて、丸テーブルと椅子もいくらかあり、時に学生の声が広い階段を抜けて2階まで聞こえてくることがあったが、おおむね静かな場所だった。米国留学から帰るころには、慣れたのもあるだろうが、図書館で“開放感”を感じるようになっていた。

今年になって、低いカウンターになって、事務室と閲覧室との仕切りが無くなった医学図書館で、久方ぶりに“開放感”を感じ、ひょっとすると、今までは無意識の内に図書館にマイナスイメージがあったのかもしれないと思いがたった。図書館の方とも話し易い雰囲気醸し出し、文字どおり垣根が取り払われたように感じられる。“自由”があった。その雰囲気は、利用する人々の精神活動に対して、さらに良い影響を持つと確信している。もちろん、図書館で大声を出すのはマナー違反だが、小さな声で、闊達な議論くらいは許していただけるのではと期待している。

